

坪井善明著「ベトナム新時代 - 豊かさへの模索 - 」岩波新書、岩波書店 2008年8月20日刊を読む

### 豊かさへの模索

1. ホンダのバイクに大人三人や、子どもを入れると一家全員五人が乗るような光景は今はめっきり少なくなったが、2007年までのベトナムでは日常的だった。溢れるばかりフルーツを積んだホンダ、後ろがまったく見えないほど大きくて上背のある荷物を積載したホンダなどの想像を超える有り様を見るにつけ、その芸術的な器用さに「これぞベトナム」と感嘆の声を上げたものだった。思わず笑ってしまうほど、目の前にあるものを創意工夫してアクロバットの的に応用する能力は驚異的だ。
2. しかし冷静に考えると、交通安全という観点からはこれほど危険なことはない。一度事故が起これば、人命に関わる大事故につながる。家族五人が乗るなら五人乗りの自動車を、大きな荷物を安全に運ぶには中型トラックを、使うべきなのだ。「貧しさ」から「豊かさ」に脱するとは、たとえば、目先の器用さを賞賛するのではなく、安全を含めた将来の見通しをより重視することなのだと思う。今こそ、その萌芽は見られるが、ベトナムには根本的な発想の転換が求められているのだ。
3. これは、政治や社会の骨組みに関しても同様であろう。グローバル化した地球社会で確固たる地位を築くためには、「国家百年の計」に基づくスケールの大きくかつ強固な基盤をつくる必要がある。優秀な人々がたくさんいるのだから、各人の潜在能力を最大限引き出すためにも「民主化」は必須だろう。民主主義とは何よりも、一人ひとりに自由を与えて、自分の人生を十全に生き切るチャンスを保障しようとする制度なのだから。
4. また、経済の自立は、他国からの援助頼みをまず脱するところから始まる。生活必需品の工業製品も自分で製造するのが基本であろう。さらに、国際競争力のある商品を製造して、広く世界市場に売り込む必要がある。
5. そういう「普通の国」にベトナムもなる時点に来ている。
6. そのためにも、人材の育成は急務だ。人材が育つのは10年20年の単位で測る、時間のかかる事業である。この分野では、日本が手助けすることは大いにある。何よりも、20 - 30年の中期目標、50年や100年先の長期目標を持つメンタリティを養成することが肝要なのである。
7. 2002年に刊行した著書で、ベトナム人の特徴を「楽天的でしたたか」と記したことがある(『ベトナム現代政治』東京大学出版会刊)。その「楽天的」の意味するところは、絶望的な状況だからこそ、意識して楽天的にならない限り生き抜けないから、「楽天的になる」というものだった。また、「したたかさ」は、悪い意味ではなくて、極貧の物のない状況のなかで、あらゆる知恵を絞

って生き抜くという「したたかさ」であった。多分、分析は間違っていないと信じたいが、その意味内容を転換する必要を感じている。「楽天的」とは、言葉の本来の意味で、将来にわたって明るい見通しを持つように生きることであるし、「したたかさ」とは、生き馬の目を抜く国際金融ビジネスにも打ち勝つだけの洞察力と知識を習得して判断する姿勢のことであろう。ベトナムが新時代に対応して、人々が幸せになることを祈りたい。

[ コメント ]

小田実氏が代表をしていた「ベ平連(ベトナムに平和を市民連合)」の反戦デモに 1968 年に参加して以来 40 年間、ベトナムをベトナムの立場で見続けた坪井先生の心暖まるベトナム論。

国民一人ひとりの人生の成功と持続発展可能な国家づくり、正常に機能する社会づくりをどう果たすか、日本がそれにどう貢献できるか考えるには絶好の著。

- 2009 年 11 月 6 日林明夫記 -